

---

# マスター・キー

notsomuch

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マスター・キー

### 【Nコード】

N81580

### 【作者名】

notsomuch

### 【あらすじ】

「あのー、ちよつとご相談が・・・」

時たま舞い込む依頼に不真面目に取組む、人とちよつと変わった特長を持つ人々。彼らは頼まれれば、どんなに下らない事件でも、どんなに難解な事件でも、完全に解決に導く暇人の集団——、『亀吉の会』。

不定期更新。

## 序1・過去

私が違和感を感じ始めたのは、果たしていつの頃からだっただろうか。

幼稚園の頃、テレビで何か怖い話を見て泣いてしまった事がある。恥ずかしくて、もし誰かに知られたら、きつとからかわれるだろうと恐れた。次の日、私は友達を自分から遠ざけ、絶対に誰も私に手を触れられないように万全の注意を払った。

が、何気なくじゃれついてきた友達を懸命に降りほどいた挙げ句に、私は彼女を泣かせてしまった。困り顔の先生が近くに寄ってきて、私たちの傍でしゃがみ、

『どうしてそんなにアキちゃんから逃げるの』

『だって』

私は先生なら分かってくれるだろう、笑いもしないだろう、と思いい、そこから先は先生の耳元で囁いた。

『昨日、怖い話見て泣いちゃったから、知られたくないの』

耳元から離れた私を、先生は呆れ半分笑い半分の顔で見つめ、私の耳に口を寄せてこう言った。

『黙っていれば分からないから大丈夫よ』

私は呆れた。

何を言っているのかと思った。

でも既に先生は立ち上がっていて、先生の肌――そう、しゃがんでいた時は手や顔に触る事ができた――は、厚いズボンに隠れてしまっていた。

家に帰り、母親にその話を話した。彼女は一人娘である私にも余り関心を払わない母親で、その時も私の話を適当に聞き流していた。

しかし私がアキちゃんを泣かせてしまったと知るやいなや、鬼のような顔と声で私を叱りつけた。それは私に人を泣かせてしまった事への反省を迫ると言うより、アキちゃんの母親を気にしての事だったように思う。

アキちゃんの母は保護者達のリーダー的存在だった。

私は母に分かって欲しくて、泣きながらこう言った。

『でも触られたら、泣いたのばれちゃう』

『なんで触られたらばれるのよ！何訳の分からない事言ってるの！そんな事言ってる暇があるなら今から謝りに行くわよ！』

近所にあるアキちゃんの家、半ば母親に手を引っ張られるようにしながら向かう間、母はずっと私に小言を連発していた。

しかし私は、それどころではなかった。

母も分かってくれなかった。

なぜ分らないのか。

触られたら、ばれるに決まってるじゃない。

あ。

いや、まさか。

私の疑念が確信に変わったのは、それからしばらく経ってから。

普通の人とは、触っただけで人の考えが読める訳じゃない。  
読めるのは、自分の心だけ。

七月三日。

私が、人生最大の発見をした日だった。

序1・過去（後書き）

短い…… まあ最初だし

## 序1・現在

日本には、<sup>サトリ</sup>覚という名の妖怪がいる。飛騨や美濃の山奥に住んでいたらしい。人の姿をしているけれども本当は実体を持たないとか、二足歩行をする大猿であるとか言われる、らしい。

私の手元にある鳥山石燕の今昔図画続百鬼（当然レプリカ）に載っている覚は、後者の猿のような姿で描かれていた。というかんだこのポーズ。何やってんだこいつ？

覚は、人の心を読む。

小学校の頃、その事を妖怪好きの友人から偶々聞いた時には驚いた。だって、その力はまさに私のものではないか。すると、私はあの獣人の親戚にでも当たるのだろうか。

しかし良く聞くと、覚は人の心を読む為に肌に触れる必要もないらしい。友人は私が妖怪・覚だけに多大な興味を示した事を不思議に思ったらしく、色々と訪ねてきた。が、私の能力が特殊なもので、それがばれたらまずい事になりそうだとその頃には既に気付いていたので、私は真実を語る事なく、なんとなくはぐらかしておいた。さて。

私が頭の中で、アキちゃんや覚についての軽い回想を終え、遠のいていた意識を再び眼前の集団と一人に移す。

いかにも『俺ら悪い子ですよ』とアピールしたいかのような服装

をした集団。黒い制服を着崩している。所々に武器らしき物を持っている輩も見ることができる。

対するは、眼鏡をかけ、制服を着たひ弱そうな少年。つつても私より年上。

いじめ？ いやいや。

「だからお前らはな、その間抜け面した女の子を放した方がいいと思う」

少年の冷静な声に対し、怒号と笑いが飛ぶ。

うーむ、やはり小森先輩、酷いな。間抜け面じゃないよ！っていう意味も含むけど。

彼が本気の百二十分の一でも出したら不良集団の一つや二つ、すぐに戦闘不能に陥るはずなのに——いや、別に見た事ないけど多分できそうな気がする——、明らかにやる気のない、しかし冷静な声で、むしろ不良達を煽っている。

なんか嫌な事でもあったのかな。

私とは言えば、今ロープで雁字搦めにされている上、手には手錠、口には猿轡と酷い有様である。結構痛いぜ。食い込む。

「もう面倒臭え、やっちまおうぜ」「そうだな」「半殺しで」「とりあえず全裸にして道路にでもほっぴり出しとくか」「あのすかした面潰すぞ」

穏やかな内容ではない。私は不良達の背中を覗む。

「いいよ、かかってきな」

しかし小森先輩は薄ら笑いを浮かべて挑発する。喧嘩慣れた屈強な不良八人、それに対して針金のような体をした眼鏡一人。

「じゃあ、遠慮なく」

おう、やっちまえ、という半ば笑いを含んだ声援を送られつつ、下っぱらしい一人が小森先輩の方に歩を進める。

一人で充分と判断したのだろう、他の連中はそこから一步も動かない。

一対一。

それでも、誰がどう見たって、勝てっこない。

「まずはどこがいい？」

「どこからでも」

しかし彼は薄ら笑いをやめない。不良達の背中に阻まれて少し見えにくいけど、不良の顔が少し怒りを帯びたように感じる。小森先輩は、自分の薄ら笑いが生み出す効果を重々承知しているのだ。

「ふざけてんじゃねえ！」

不良の拳はまっすぐに小森先輩の顔面を捉え――

——そして、吹っ飛んだ。

不良が。

「よう」

小森先輩は吹っ飛んだ不良に一瞥もくれる事はなく、自分の目の前に現れた人物に軽く手を挙げる。

「……時間ぴったり、ってところですか。僕が間に合わなかったらどうしてたんですか。もっともっと時間稼ぎ、できたでしょう」

その人物——非常に小柄で、おとなしそうな顔をしている——は、体ごと振り返って小森先輩を軽く非難する。完全に不良達は無視されている。後ついでに私も無視されてる。

「まあ多分大丈夫じゃないかなと思ってさ」

「相も変わらず適当な」

その少年、黒野くんは呆れたと言いたげな表情を浮かべつつ、背後から彼の頭に振り下ろされた鉄パイプを片手で受け止める。

「どんぐらいかかる？」

小森先輩が呑気な声で訪ねる。背中から襲い掛かった不良は、黒野くんの右手から鉄パイプを奪い返そうとするも、当然成功しない。

「さあ、十六秒ぐらいですかね」

それに落ち着いた声で黒野くんが答える。一人二秒の勘定になるなあ。すげえ。

「くそ、こいつ……チビの癖に強」

「小森先輩。やはり八秒です」

にこやかな声と表情を浮かべた黒野くんが左手を振ると、鉄パイプ不良は真上に二メートル程吹っ飛ぶ。一人一秒。小森先輩が私の所に向かう間、黒野くんは順調に不良を掃討を進める。  
。どこかのキノコを食べると巨大化する兄弟が星を取った時のように無敵な黒野くんに為すすべもなく、不良達は呆気なく敗れ去っていく。

小森先輩がまだ私の元に到着しない内に、不良達は全員、虫の息になっていた。

「ほら、大丈夫か」

私の猿轡を外し、次にロープと手錠に取り掛かりつつ、小森先輩が特に心配していなさそうな声色で訊いて来る。

「いえ、やっぱりちょっと痛いです」

「あつくそ手錠のカギ探すの面倒くせえ」

人の話聞いてねえ。

「黒野、手錠ちぎっちゃって」

「了解、です」

溜め息まじりの黒野くんが、私に掛けられている金属製の手錠を、素手で引きちぎった。もうなんか、すげえ。

「黒野くん、ありがとう」

小森先輩には言わない。

「ああ、いやいや……。ええと、なんでこんな事になったんですか」

「なんか随分前の事件かなんかで、かなり怨みが溜まってたらしいぜ」

「長谷川さんに？」

「いや、俺に」

納得したような表情を浮かべる黒野くん。

「ああ、長谷川さんは餌ですか」

『亀吉の会』はその活動内容によっては人に怨まれる事も多い。そして、『亀吉の会』—多くの事件を解決した小森先輩が、多くの怨みを買っていない筈はない。

「餌にされてしまったよー」

「ところでこいつらどうするよ」

猿轡関係ない。喋っても反応しねえこいつら。

「そうですね、とりあえず警察に連絡して逃げますか」

「そうするか。おっと」

小森先輩は懷から白い粉の入った小袋を十数個取り出し、倒れて気を失っている不良のポケットに入れていく。

「小森先輩、それまさか……麻」

「いや、小麦粉」

「成程、警察にもっと絞られるようにとの嫌がらせですね」

「そうそう」

全く用意がいい。そして黒野くんと会話のテンポはいい。

「さて、帰るか」

地面に倒れ伏す不良達を避けつつ黒野くんが先に行ったのを確認して、私は小森先輩の手をそっと掴む。

「あの」

ん、という表情を浮かべる小森先輩。

「あれ、本当に小麦粉ですよね」

眼鏡の奥の目が、ニヤツとした笑いを帯びる。

「さあね」

( 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2 7  
9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1 6 9 3 9 9 3 7 5 1 0 5 8 2 0 9 7 4 9 4  
4 5 9 2 3 0 7 8 1 6 4 0 6 2  
8 6 2 0 8 9 9 8 6 2 8 0 3 4 8 2 5 3 4 2 1 7 0 6 7 9 8 2 1  
4 8 0 8 6 5 1 3 2 8 2 3 0 6 6 4 7 0 9 3 8 4 4 6 0 9 5 5 0 5  
8 2 2 3 1 7 2 5 3 5 9 4 0 8  
1 2 8 4 8 1 1 1 7 4 5 0 2 8 4 1 0 2 7 0 1 9 3 8 5 2 1 1 0 5  
5 5 9 6 4 4 6 2 2 9 4 8 9 5 4 9 3 0 3 8 1 9 6 4 4 2 8 8 1 0  
9 7 5 6 6 5 9 3 3 4 4 6 1 2  
8 4 7 5 6 4 8 2 3 3 7 8 6 3 1 6 5 2 7 1 2 0 1 9 0 9 1 4  
5 6 4 8 5 6 6 9 2 3 4 6 0 3 4 8 6 1 0 4 5 4 3 2 6 6 4 8 2 1  
3 3 9 3 6 0 7 2 6 0 2 4 9 1  
4 1 2 7 3 7 2 4 5 8 7 0 6 6 0 6 3 1 5 5 8 1 7 4 8 8 1 5  
2 0 9 2 0 9 6 2 8 2 9 2 5 4 0 9 1 7 1 5 3 6 4 3 6 7 8 9 2 5  
9 0 3 6 0 0 1 1 3 3 0 5 3 0  
5 4 8 8 2 0 4 6 6 5 2 1 3 8 4 1 4 6 9 5 1 9 4 1 5 1 6 0 9  
4 3 3 0 5 7 2 7 0 3 6 5 7 5 9 5 9 1 9 5 3 0 9 2 1 8 6 1 1 7  
3 8 1 9 3 2 6 1 1 7 9 3 1 0  
5 1 1 8 5 4 8 0 7 4 4 6 2 3 7 9 9 6 2 7 4 9 5 6 7 3 5 1 8 8  
5 7 5 2 7 2 4 8 9 1 2 2 7 9 3 8 1 8 3 0 1 1 9 4 9 1 2 9 8 3  
3 6 7 3 3 6 2 4 4 0 6 5 6 6  
4 3 0 8 6 0 2 1 3 9 4 9 4 6 3 9 5 2 2 4 7 3 7 1 9 9 0 7 0 2 1  
7 9 8 6 0 9 4 3 7 0 2 7 7 0 5 3 9 2 1 7 1 7 6 2 9 3 1 7 6 7  
5 2 3 8 4 6 7 4 8 1 8 4 6 7  
6 6 9 4 0 5 1 3 2 0 0 0 5 6 8 1 2 7 1 4 5 2 6 3 5 6 0 8 2 7

7 8 5 7 7 1 3 4 2 7 5 7 7 8 9 6 0 9 1 7 3 6 3 7 1 7 8 7 2 1  
 4 6 8 4 4 0 9 0 1 2 2 4 9 5  
 3 4 3 0 1 4 6 5 4 9 5 8 5 3 7 1 0 5 0 7 9 2 2 7 9 6 8 9 2 5  
 8 9 2 3 5 4 2 0 1 9 9 5 6 1 1 2 1 2 9 0 2 1 9 6 0 8 6 4 0 3  
 4 4 1 8 1 5 9 8 1 3 6 2 9 7  
 7 4 7 7 1 3 0 9 9 6 0 5 1 8 7 0 7 2 1 1 3 4 9 9 9 9 9 8 3  
 7 2 9 7 8 0 4 9 9 5 1 0 5 9 7 3 1 7 3 2 8 1 6 0 9 9 6 3 1 8 5  
 9 5 0 2 4 4 5 9 4 5 5 3 4 6  
 9 0 8 3 0 2 6 4 2 5 2 2 3 0 8 2 5 3 3 4 4 6 8 5 0 3 5 2 6 1  
 9 3 1 1 8 8 1 7 1 0 1 0 0 0 3 1 3 7 8 3 8 7 5 2 8 8 6 5 8 7  
 5 3 3 2 0 8 3 8 1 4 2 0 6 1  
 7 1 7 7 6 6 9 1 4 7 3 0 3 )

突如頭に鋭い痛みを感じ、手を放す。

「読ませないよ」

彼はまた、例の薄ら笑いをする。

「円周率ですか……」

いきなりこんなに多くの情報をぶち込まれたら。

私の頭の処理能力を超えてしまう。

「ほら、早く行くぞ」

「はい……」

まだ少し傷む体を奮い立たせ、なんとか立ち上がる。

全く。

小森先輩の心を読むなんて、一体いつになればできるのか。

今は多分、手加減されている。それでもまだこんなに痛むのに、本気なんて出されたら。

死ぬんじゃないだろうか。

未だガンガンする頭を手で押さえつつ、自分の能力の限界を感じ、私はそっと溜め息をついた。

序1・現在（後書き）

ひゃっほう！

## 生物教室とその愉快な仲間達

『亀吉の会』本部は、私達の通う都内某高校の生物教室に設置されている。整然と椅子と長机が並び、実験に使う様々な道具は棚に仕舞われていて。不気味なホルマリン漬けも一緒だ。そして朝は何故かじめつと湿り、昼は太陽の光が眩しいのでカーテンを締め切り電灯も性能が悪いので薄暗く、夕方はなんだか良く分からない集団が活動の本拠地になっているという、一般生徒から見れば近寄りがたい教室である。

朝昼晩、生物教室には亀が一匹いる。

彼の生活する最高級の広い水槽は徹底的に磨きぬかれ、中には厳選された石が設置され、傍に置いてある亀用の餌は極上。そして亀吉に触ろうとする生徒を見張る為、監視カメラまで付けられている。

水槽の前には木製の立派なネームプレートが立てられている。そこらの家の表札より余程立派なそれには、『亀吉』という文字が美しい草書体で彫られ、文字の上には金箔が張られている。

夕方、生物教室には人が五人ほどいる。

一人は何かの漫画を面白そうに読み（彼は受験生である）、一人はスクリーンを使い自分で持ってきた据え置きゲーム機を楽しみ（彼女も受験生である、そして個人によるスクリーンの使用と校内へのゲーム機の持込みは禁止されている）、一人は人差し指で倒立をするというトレーニングを無表情で行い（彼は人間である）、一人はそんな彼らに興味を払う事もなく生徒達の成績表を作成している（彼女は教師である）。

そして私は一人、ぼーっとしている。

『亀吉の会』に入った最初の頃こそ岩戸先輩の天才的なゲームプレイに目を瞞っていたものの、最近は少し慣れてきてしまい、逆に普通の人がゲームをしているのを見ると哀れに思えるようにさえなってきた。

時々対戦しないかと訊かれるが、ゲームに無縁らしい黒野くんはまだしも小森先輩まで全く歯が立たないとなれば、私なんぞが行く幕ではない。スキルが違いすぎるのだ。

成績表を付け終わったのか、生物教師兼『亀吉の会』会長、我らが焼津先生は軽くのびをする。

「どうですか、今回は」

暇なので訪ねてみる。

「んー？ えつとね、平均点は56点だね」

焼津先生はノートPCの画面を眺めつつ、ぼんやりとした口調で答える。

「低いですね」

「でしょー？ でも長谷川さんは32点よ」

ふうん。

「相変わらず阿呆だな」

ボソツと呟く岩戸先輩を睨むとすぐに顔を逸らす。それでも画面を見ずにコントローラーを素早く動かし、モンスターを薙ぎ倒していく。長く黒い髪を背中まで垂らした後ろ姿に、暫し、少しだけ嫉妬する。まさに美。正面はもつと美。

先生もする事が無くなったのか、岩戸先輩よりはかなり短めの髪をくるくるといじりつつ、私の隣に座ってぼーっとスクリーンを眺めている。教師なのに注意しないんですね、焼津先生。

と、おもむろに黒野くんが人差し指倒立から跳び上がり、空中で一回転半した後つま先から綺麗に着地した。なんだこいつ。

そのままゆっくり亀吉の水槽の前まで歩いて行き、極上亀の餌を取り出して亀吉に与える。ああ、もうそんな時間か。

「……最近、なんもなくて暇だな」

こちらもボソツと呟く小森先輩。受験生なんだから勉強でもしてればいいんじゃないですか？

「……じゃあなんかやる？」

岩戸先輩が軽く提案する。

「やる」

即答する小森先輩。

「黒野くん頼んだあ」

コントローラーを掴んだまま、餌を仕舞い終わったばかりの黒野くんに声を掛ける。

「分かりました」

特に不満そうな顔をする訳でもなく、寧ろどこことなく嬉しそうに返答している。まあ岩戸先輩美人だもんなあ。

「えっと……ああ、オッケー、よし……」

何か呟く声の後に、彼は亀吉の甲羅に手を乗せる。

「亀吉さま亀吉さま、どうか暇な私達に、何か事件をお与え下さい」

直後、亀吉の甲羅は光り輝き、生物教室と私達を、淡い金色の光で包み込む。例の最高級水槽はもちろん、実験器具の一つ一つ、そしてホルマリン漬けでさえもが神聖な物に見える。小森先輩の手にある漫画も、まるで何かの聖典のように神々しく感じられる。

綺麗な光景だ。

岩戸先輩もゲームの手を止めて、その光景に見蕩れている——と思ったらスクリーンにはミッションクリア後のリザルト画面が表示されている。丁度終わったからちょっと見てるだけか、成程。

頭上から厳かな声が響き渡る。

『よかるっ』

突然、金色の光は消えた。黒野くんは水槽から離れ、ご褒美を上げようとしているのか、再び極上亀の餌に手を伸ばしている。終わり方はなんだか呆気ない。

「おい黒野、今回はどんぐらいチャージされてた？」

「黄色だから……二段階目ですね」

「成程」

納得したように小森先輩は頷く。私はまだ、亀吉のどこを見て色を判断しているのか、そして何段階目まであるのか、そもそも段階って何かと良く分かっていない。まあ別にどうでもいいよね！

「……まだかな……」

「私はまだだと思うよ。久々にゲームやる？」

彼女は小森先輩に、二つ目のコントローラーを差し出す。

「それもいいな」

二人で何かゲームを始めてしまったのを見て黒野くんは顔を顰めるが、特に何を言う訳でもなく、私と先生のいる長机に一緒に座る。

「あー教師辞めたい」

「時々脈絡もなく投げやりにならないで下さいよ」

「じゃあ辞めたくない」

「それは良かった」

雑談をしている内に下校時間は近づく。

「そういえば小森さんと岩戸さん、今日って十時までずっと課外授業ある日じゃなかったっけ」

思い出したように焼津先生が声を掛ける。

「いいです」「ゲームです」

二人の端的な答えを拡張すると、

「面倒臭いし必要無いので課外授業はなんにも取ってないです」

「ゲームがしたいので課外授業はなんにも取ってないです」

になるだろうと予想される。

「成程、先生良く分かる分かる」

分かつちゃう先生すごい。

「あー負けた」

「お、前より粘ったじゃん」

次々に瞬殺され続ける小森先輩のキャラを見続けるのにも飽き、ああ後五分で活動終わりタイムだなあなんて考えていると。

ガ……ガラッ……ガラッという、自信無さ気に引き戸を開ける音が発生した。

ゲーム中の二人は特に気にする事もなくゲームを続ける。というか多分気付いてない。教師が来たんだったらどうするつもりなんだろう。というかここにもう既に生物教師いるけど。

「あ、あのー」

ゲームスクリーンを少し驚いた目で見つつも、弱弱しい声でその生徒は言った。

「あのー、ちょっとご相談が……」

小森先輩と岩戸先輩は、まだまだゲームに夢中だった。

## 生物教室とその愉快的仲間達（後書き）

結局長さ変わんね まいっか

## オブジェ

しかしまさかこの狭い学校に、私達の他にも学校非公認の集団があったとはね。

彼の名前は、伊藤くんというらしい。黒野くんとは知り合いだったらしく、伊藤くんの緊張は早めに解けたようだ。高一。同学年だけど下の名前とか知らないです。

相談を持ってきた彼に気付かずゲームを続ける二人をゲームから引き離し、彼の相談を聞こうとした所でチャイムが鳴り、早く家に帰りたい焼津先生がここからさっさと出ないとカギかけて閉じ込めるぞと脅したので仕方なく全員で外に出て、「だったら帰り道に聴こうじゃないか」という賢明な判断をした岩戸先輩のお陰で、今皆で一緒に帰っている。

彼は、自らの所属する学校非公認サークル・その2、『怪奇現象研究会』の代表に選ばれ、我らが学校非公認サークル・その1、『亀吉の会』に遠征してきたと言うのだ。

これまでは全く『亀吉の会』の話など話題にも上らなかったそうなのだけど——三十分程前にいきなり、どうやら『亀吉の会』とかいうサークルがあるらしいから、ちょっと相談してみようか、という話が出たそう。反対者もゼロ。チャージ二段階目の亀吉の力つてすごい。

「まあ、怪奇現象っていう括りですが……まあ都市伝説とか、妖怪とか、幽霊とか、まあ色々……」

『亀吉の会』の面々の質問攻めに、少々戸惑いつつも全てに真面目に答えている。伊藤くん偉い。

「そろそろ本題に入ろうか」

いつの間にか、というか最初から脇道に逸れまくり、UMAとかUFOとかの話を延々と続ける小森先輩達に業を煮やしたのか、岩戸先輩が切り出す。

「あ、はい、えつと」

こちらもいつの間にか夢中で小森先輩と議論をしていた伊藤くんは、我に返った様子で慌てる。小森先輩は特に未練もなく切り上げたようだったが、黒野くんは少々不満気だった。怪奇現象とか好きだもんなあ。

「最近ですね、近所の犬や猫がですね、」

猫という単語を聞いた途端、あからさまに興味を持ち始める岩戸先輩。猫とか好きだもんなあ。

「殺されてるんですよ」

ある程度予期されていた言葉だったのか、『亀吉の会』の面々は殆ど無反応。岩戸先輩も、特に表情を変える事なく視線を前に戻し、

「……前、朝、道端で見たよね」

「先月の二十五日。三毛猫だったな——」

岩戸先輩の呟くような言葉に頷く小森先輩。一瞬、何か言葉を続けようとしていたが、思い直したのか、口を噤む。

「……僕も見ただ事あるな。帰り道に駐車場で、犬だったけど——やっぱりあれか」

黒野くんも、自分のつま先を見ながら補足する。

「始まったのは先月の下旬らしいから……多分、それだな」

伊藤くんは頷く。

私も、多分見た事がある。やはり、学校の近くの道で。となると  
全て——

「——この学校の傍で起きてるね」

「はい。今まで発見された死体は全て、この高校の近辺に集中しています」

同学年なのに敬語を使われる。しかしそもそも、私が自分と同年だと分かっているのかどうか怪しい。

「とすると、君らは学校周辺以外の地区も調べたのか」

岩戸先輩の突っ込みが入る。

「ええと、そうですね。最初に報告があつたのが先月の下旬。それから何回か目撃情報が入って、本腰を挙げて調査を始めたのが先月の中旬。なので先月の中旬から、手分けして——といってもサ——

クルメンバーは八人くらいですが——結構遠く、二、三キロ先まで探して、その場所を地図に書き込んだんですが。

結果、全ての死体は僕らの学校から半径一キロメートルの範囲に集中しているという結果が出ました。数で言つと、ええと、十二体ぐらいだったと思います」

多いな。

「え、それずっとやってたのか？」

黒野くんの驚きの声が入る。

「まあ、活動日はずっと。他に何にもやる事ないし」

にしても、一ヶ月ちよつとの間調査を続けるのは凄い。『亀吉の会』にそんな忍耐力のある奴は居ない。

「噂をすれば」

岩戸先輩が、右方を指差す。

全員、足を止める。

噂をすれば、に続く言葉は多分、『例の死体があるぞ』、だ。

見るべきかどうか一瞬迷ったものの、私達はおそらく、これからその『犯人探し』を依頼される事になるだろうからして、見ない訳にはいかない。発言回数が断トツ最下位、活躍率断トツ最下位の私にも、『亀吉の会』メンバーとしての誇りぐらいある。前見た時は

目を逸らしてしまっただが、今度は――

――意を決して右を向く。

小さな公園。ベンチと小さな遊具、それに申し訳程度に砂場があるだけ。その空間の要素全てが、寂れた雰囲気醸し出している。一体誰が使うのか分からない程に寂しい公園。そしてその砂場の中央には。

私達は公園に入り、『それ』に近づく。

真っ赤な猫の死体。

元々の毛並みは灰色と白であつたという事が辛うじて分かるだけ、という程に、赤く染まっている。

そして、欠損している。

体の柔らかい部分は、既に無く――そこまで思考した所で耐え切れない吐き気に襲われ、私は視線を死体の上に外す。

猫の死体の傍にある台から針金が伸びていて。その先には。

空飛ぶ円盤の安っぽい模型が、付けられていた。

円盤の下からは黄色いセロハン紙を円筒状に丸めたような物が、死体に向かって伸びている。

遠くから見れば、あるいは――猫の死体を、円盤の下方から出る黄色い光で取り込もうとしているように、見えるかもしれない。

上に円盤。下に死体。

猫の死体と円盤の模型で作った、オブジェ。

全くもって。

常軌を逸している。

岩戸先輩は平気そうな顔をしているが、今もし彼女の手を取ったら――動物好きの彼女の事だ。どうなっているか想像するのも容易だ。

黒野さんと伊藤くんは、心配そうな顔でこちらを見て……え？

「長谷川。向こう行ってな」

言葉は厳しいが。それでも柄に無く優しさを帯びた小森先輩の言葉を耳にし、私は初めて――

――自分が、泣いている事に気付いた。

「ご、ごめんなさい、僕が相談したせ――」

岩戸先輩が黙って首を振るのを見て、伊藤くんは言葉を止める。

「私、い、ます」

なんとか搾り出した声に、小森先輩は、そうか、とだけ答える。小森先輩と同じように、本当は優しい岩戸先輩。私を心配しなかったのは――それだけ必死で堪えているから、なのだろう。

一人だけ逃げる訳にはいかない。私は涙を拭う。視界が、クリアになる。

そう、私はあの時だって――

小森先輩は、すたすたと猫の死体のすぐ傍に歩み寄り、一礼。手を合わせる。そして円盤の方の模型を手に取り、意を決した様子の黒野くんに渡す。

小森先輩は鞆からビニール袋を二枚取り出し、それを両手にはめる。

そして……

そして、猫を調べ始めた。

伊藤くんの口から驚きの声が漏れる。

「……」

無言で猫の頭部、胸部、手、腹部、脚、尾を調べ、無言で猫を裏返す。

その淡々とした作業を前にして、誰も口を挿む事ができない。今の状況を警察に見つかったら、確実に勘違いされてしまう。

調べ終わった小森先輩は、その死体を持ったままおもむろに立ち上がり、

舌打ちをして猫の死体を放り出す。死体は、砂場に無残に崩れ落ち

る。

「ちよつ……！ 何やってるんですか！」

流石の私も、許す訳にはいかない。黒野くん、そして伊藤くんも、信じられないといった表情で小森先輩を見ている。岩戸先輩は、呆れ果てた目で見ていた。

小森先輩を除いた、私達三人を。

「模型だ」

岩戸先輩の冷たい声が、私の耳に響く。模型？黒野くんからも疑問の声が聞こえる。

「そう、模型だ。結構高い材料使ってるぞ、これ。骨格から全て完璧だ。でも偽物だ。全く上手く作ってる。どんな暇人だ」

吐き捨てるように言う小森先輩に、岩戸先輩を除いた私達は、驚きで返す言葉が無い。

「さっき一応しておいた礼と合掌が無駄になったな。それにしてもこのUFOの模型は死体のリアルさを引き立てる為にわざと安っぽく作ってあるのか？ 全くご苦労様な事だ。」

そもそもこれはキャトルミューティレーションを模したオブジェなのか？ それとも地球の生物のサンプルを採取しているという設定なのか？ どの星にわざわざ死体を痛めつけた後にUFOに飛び乗ってそれを回収する馬鹿がいるんだよ。もうちよつと設定を考える設定を」

苦々しいと言わんばかりの口調。

キャトルミューティレーション。家畜の目や性器などが切り取られ、死体となつて発見されるという現象。当時は宇宙人の仕業ではないかと噂されたが、今では、死んだ家畜の柔らかい場所を虫が好んで食べた為に起こった物であると、合理的な説明がつけられている。

「私と小森が前に見た物も模型だった。何度も見ている筈なのに気がつかないとは、伊藤くん、君の目は節穴だと言わざるを得ないね」  
今にも溜め息をつきそうな声で言う、岩戸先輩。さつき無表情だったのは本当に何も感じていなかったからで、私を心配する素振りを見せなかったのも事実を知っていたから、だったのか。

触れないと心を読めないなんて、不便だ。分かっていれば平然としていられたのに。泣き損だ。

呆れられた伊藤くんは縮こまっていたが、やがておずおずと疑問を呈する。

「でも、なんで報道されないんでしょうか。例え模型でも、こういうの、マスコミは好きなんじゃないですか？ 警察だって、動いていないみたいですし……」

「さあ、なんでだろうな」

小森先輩は、上の空だった。

## オブジェ（後書き）

章設定と題名、ちょっと変えました。  
もうこれで固定（のはず）。  
一週間に一話以上は行きたいなあ。

## 超人と依頼人と私、空へ。

その後私達の間会話はなく、ほぼ無言の状態が続いた。それぞれが模型の意味などについて考えているのだろうが——どうも居心地が悪い。小森先輩や岩戸先輩——全く勉強しない癖に秀才の二人の先輩——が考えて分からない事は私にも分からないのだから、なんとなく考える気が起こらないのだ。こんなだからいつまで経っても最下位なのだろう。

「じゃあ、私達はここで」

終始無言を貫き通していた岩戸先輩は、駅前に着いてようやく声を発した。どうやら何か用があるそうで、小森先輩と二人で駅を素通りし、多くの人々で溢れかえる街中へ消えていった。

「……どうします？」

さつき岩戸先輩に呆れられたのがショックだったのか、少し怯えた様子で私に尋ねてくる。近くのファストフード店に引っ張りこみ、いくつか商品を注文し受け取った後、テーブルにつく。未だ萎縮する伊藤くんにとりあえず、私が同学年である事を今更ながら伝えると、多少うるたえてたものの、私の頼みに応えてすぐに丁寧語を無くしてくれた。

「いやあ、こう言っちゃ悪いけど、知らなかった」

ポテトを頬張りつつ頭を掻く伊藤くんは、私と黒野くんは苦笑する。

「いえいえ。私も伊藤くんの事知らなかったし」

「まあ、長谷川は大人しい方だからな。クラスも違えば部活も違う、知らなくてもおかしくはないだろう。」

ところで、僕のロズウェル事件についての研究が最近落ち着いて来たんだけど――」

ロズウェル事件は――確か、どっかで宇宙船が落ちたとかいう事件だっけ。大戦後だった気がするけど……まあ関係無いしいいか。

UFO話で盛り上がる男二人をほぼ無視し、窓の外に目を遣る。暗い街が、人工的な光で照らされている。亀吉の金色の光には到底及ばないなあ。ああ、もうすぐ七時かな。

例の模型。

私の思考は、それでもそちらに流れる。

誰が、何の為に。

警察に通報が行ってもおかしくなさそうな惨状なのに、未だニュース沙汰にも成っていない点も納得できない。

そうだ、あの死体はいつまで残っているのだろう。目撃者が去った後に犯人が持ち去ったとすれば？ 通報を受けて警察がその場所に向かったとしても、既に模型は無い。

そしてそれが何回か続けば？

『動物の血塗れの死体が落ちている、何か小さいUFOみたいな物

も一緒だ』。

毎回寄せられる奇妙な通報に、警察はいつしか、その重い腰を挙げ  
るのを躊躇う様になるのでは？

しかし、と傍らで議論に熱中する二人を見遣りながら思う。

何の為。これが最大の謎だ。あの模型は、もちろん作るのは難しい  
だろうが、時間を掛ければおそらく誰にでも可能だ。だから少なく  
とも、それだけで犯人を絞り込む事は難しい。模型を放置すること  
も、時間と場所を選ばないならば誰にも発見されずにできるだろう。

しかし。

私の想像が正しいとしても、そんな事をする道理は——必要性は、  
ない。

警察が犬猫の死体についての通報に耳を貸さなくなったからといっ  
て、一体何の利点が？

ん？

いや、でも、もしかすると——

「——川、長谷川」

いつの間に思考に集中してしまっていたのか、私は肩を叩かれて我  
に返った。黒野くんだ。

「何、どうし……」

黒野くんの表情が堅い。

「まずいぞ」

黒野くんが顎で示した先には――、血走った目をしてこちらを睨みつける、伊藤くんの姿があつた。今にも襲い掛かつて来そうだが――、時々痙攣を起こしたようになるだけで、席を離れない。周囲の客も、まだ異常には気付いていないようだ。

「長谷川」

「了解」

彼の、伊藤くんの手を素早く掴む。抵抗はされない。ただ、さつきよりも――痙攣の間隔は減り、激しさは増している。

(おかしいおかしい。動かない。動かない。ああ、動い。う、あ  
……痛、い。頭頭頭頭頭頭ががががが。あああ。あああ  
あああ。あああああああああああああ。あああああああ  
ああああ——)

思考が、途切れた。痙攣も、不自然に治まる。

「黒野くつ」

咄嗟に手を放して叫ぶ。伊藤くんは既に思い切り席を立ち、椅子を蹴飛ばし、私の両目を狙う右手が襲い掛かる――も。

黒野くん、あつさりと阻まれる。

周囲の客は伊藤くんの尋常でない目つき、それに蹴り飛ばされた椅子に悲鳴を挙げ、逃げ出し始める。

黒野くんは見下すような目つきで伊藤くんを見、彼の右手首を掴み続ける。唸り声と共に続けて襲い来る左手首をいとも容易く掴み取り、固定する。

「長谷川」

「思考が突然途切れてた——多分、干渉されてる」

やはりそうか、と頷きつつ、伊藤くんの両手首を締めつける。しかし彼の口から悲鳴は漏れない。掴まれている手を振りほどこうと、その身を振っているだけだ。

「……悪いね」

諦めたような顔つきと共に、黒野くんの手刀が暴れる伊藤くんの首筋に叩きつけられる。うわっ痛そう。

が。

「あれー、おっかしいなあ」

気絶しない。不思議そうにする黒野くん。

彼の手刀を食らって気絶しない、と、は？

いや、もしかすると気絶してるのか？

「黒野くん、多分これ、精神って言うか、身体全体を操られてるのかもしれない」

つまり、人形や傀儡のように。私の説明に納得した様子の黒野くん。役に立てたよわーい。

「成程。うーんまずいな、絶対警察呼ばれてるし、あっちの方でガン見してる人いるし——ってか店員か」

店員だった。呼ばれても伊藤くん、というより黒野くんの迫力に恐怖を覚え、足が竦んでいるらしい。気の毒に。

「さて、僕でも長谷川でもこいつを治せないとすると——」

ちらり、と窓を見る。

「——とりあえず逃げる、ね」

「1」名答」

直後、右手に暴れる伊藤くんの両手首を持ち、左の小脇に私を抱えた黒野くんは、店員とその他やじ馬の悲鳴を背に受けつつ、窓を突き破って外に飛び出した。

少しも衝撃を感じさせず、すたり、とアスファルトの地面に着地する黒野くん。

「あちゃー、これはまずくない？ 黒野くん。目立ちすぎ」

「……まあ、岩戸先輩が後でなんとかしてくれるさ」

飽きもせずに暴れ続ける伊藤くんを意に介さず、気楽に言い放つ黒野くんに、まあそうだよなあ、と納得する。彼女が味方についていれば、何も恐い事はない。

周囲には割れたガラスと私達を見比べ、悲鳴を上げる者、携帯電話を取り出して写真を撮る者、色々な人が集まって来ている。

「——じゃあ、とりあえず学校にでも戻るか」

黒野くんは私と伊藤くんを持ったままの姿勢で、膝を屈め——

『跳』んだ。

学校まで——っていうか跳躍もキロメートル単位になったが、もう飛翔って言うていいよね？ うん、そう、多分彼と私達は、空を『飛』んだ。学校まで、脚力だけで、2キロメートル近く。

『飛』び立つ直前に、歪んだアスファルトと、『飛』び上がる私達に驚愕する人々が見えたような気がするけれど——まあ、岩戸先輩がなんとかしてくれるだろう。

岩戸先輩に頼りきりの、私達だった。

超人と依頼人と私、空へ。（後書き）

なんか起こった。

前までの話、誤字ばかりで直してたら全部（改）に……  
もっと推敲しないとなあ。

## 屋上にて

「……目立ちすぎだから」

ジト目で私達を睨みつつ、岩戸先輩は溜め息をつく。私と黒野くんは学校の屋上で、二人仲良く正座中。伊藤くんは先程までの勢いはどこへやら、私達の後ろですっかりぐったりしている。小森先輩にやられたのだ。目から生気が失われている。

学校の屋上に降り立った私達は、長距離の『飛行』にも動ぜず暴れる伊藤くんを持て余し、取り合えず先輩二人にメールを送ってみた。数十秒後、この屋上に二人は突然降り立った。空から。速い。どういいう仕組みなんだろう。詳しくは知らない。

その後詳しい事情を聞いた岩戸先輩によって、私達は正座させられている。コンクリート硬い。

「取り合えず記憶の修正しねえとな……」

小森先輩も彼女の隣で不機嫌そうに呟く。そして懷から何か小さな袋を取り出し、ほれ、と岩戸先輩に渡す。

未だ不満顔の岩戸先輩だったが、渋々その袋を受け取り、屋上の入口に向けて歩き出す。私達には見せたくないのだろうか。何だろう。私達が知っているのは、岩戸先輩と小森先輩に任せておけば、なんでも大丈夫だと言う事だけ。そしてそれで、充分なのだ。

「しかし長谷川、お前痛かっただろ。 空気抵抗とか」

岩戸先輩が屋上の入口のドアに消えたのを見送り、小森先輩はふと思いついたように尋ねる。

「あ、僕が一時的に掛けましたから」

黒野くんが答える。平静を装っているが、岩戸先輩に叱られたショックはまだ抜けきっていないようで、その顔には元気がない。

「ああ……。……。ん？ あれ、伊藤はどうした？」

ぐったりする伊藤くんをチラリと見遣りつつ、質問を重ねる。

「え、あ、いや、伊藤にも……」

うろたえるな、黒野くん。

「馬鹿かお前は。それで飛行中に暴れたらどうするつもりだったんだよ……」

呆れ顔で黒野くんを嗜める小森先輩。最近よく呆れられるなあ。

対する黒野くんはさらに頭を項垂れ、すいません、と小さな声で謝る。可哀想。フォローを入れなければ。

「いやでも小森先輩、黒野くんが居なければ今頃」

「どつちにしろ目立ってるけどな」

確かに。……。ああ足痛い。痺れがピークに達している。

「まあいいさ、結局伊藤は暴れなかった訳だしな。暴れててもまあ、二対一なら多分勝てただろ」

それはそうかもしれない。一時的とはいえ三人とも、身体能力だけで言えば同等、地球最強になってたんだから。単純に数で言えば、勝てるはずだ。

「伊藤は、誰に――」

小森先輩が何か言おうとした時、

「終わった」

入口のドアが開いて岩戸先輩がスカートを翻して再登場し、小森先輩に例の小袋を投げ渡す。得意顔だ。

「建物の修復はやったか？ こいつら窓破ってただろ。あと道路の陥没も」

あ、という表情を浮かべる岩戸先輩の手に、小袋が投げ返される。私達をまた軽く睨みつつ、ドアの向こうに消える。横を見ると黒野くんが涙目になっている。負けるな、黒野くん。

ところで私の足はというと、ああ今立ち上がったら凄い痺れだろうなあ、と思う程に感覚が無くなっている。嫌だなあ。

「……伊藤は誰に操られていたんだろうな」

小森先輩が不意に真面目な顔になり、話題を急転換する。

そう、誰に操られていたのか。

「俺の知ってる限りでは、触れないで能力を発動する事は不可能だ。いや、できるにはできるが、その手段は俺と岩戸が所持している」

多分それは。

「見当がついてるだろうから言うが、まあさっきのあの小袋だな。操った術師に奪われていたなんて事はない。俺と岩戸で守っている限り絶対に安全だ」

例えどんな術師でも、触れられなければ、その効果を発動できない。私の読心術も、黒野さんの超人化も。

そしてまた、先輩二人から何かを奪うなんて、どう考えても不可能だ。それは私が一番良く知っている。

「伊藤の様子がおかしくなったのは店内でしたが——伊藤に触れた人物は、僕が知る限りではいません」

黒野くんが断言する。

「そうか。じゃあ——」

小森先輩が何か言いかけた所で、

「終わった」

入口のドアが再び開き、岩戸先輩が軽快な足取りで再再登場する。そして再び小袋を投げ渡す。自慢気だ。

「おう、お疲れ」

小袋を受け取った小森先輩は、それを無造作にポケットに入れる。  
管理甘くないですか？

「話進んだ？」

「お前が度々颯爽と登場するから進まない」

しゅんとする岩戸先輩。可愛いなあ。なんて思ってたら、しゅんと頂垂れた頭をわざわざ上げてまで睨まれた。力を使つてではないはずだから、気配を読んだのだろうか。慌てて目を逸らした。

「じゃあ、なんですか？」

黒野くんが促す。

「じゃあ……まあ面倒だからいいや」

なんだそれ。そう思っていると、

「小森。取り合えず伊藤くんを起こしてみようか」

ぐったりとしている伊藤くんを見遣り、岩戸先輩が提案する。ついでに君らも正座解いていいぞ、と付け加えてくれた。助かった。と思つて立ち上がると、ふらふらする。そして痺れる。隣の黒野くんは平然としている——当たり前だ。黒野くんなんだから。

岩戸先輩の提案に、そうだな、と軽く返答し、小森先輩はつかつか

と伊藤くんに歩み寄る。そしておもむろに、その右手を彼の額にそっと当てる。

伊藤くんの目に少しずつ生氣が宿っていく。私は足が痺れるのを我慢し、黒野くんを支えられながら、伊藤くんに近づく。岩戸先輩がその後ろに続く。

「……あ、あれ？」

伊藤くんから困惑の聲があがる。正氣に戻った様子だけど……。目を擦る彼の額に、軽く触れる。訳が分からないといった顔だが、説明も面倒臭い。

手を離す。

「大丈夫です。正氣みたいです」

ちゃんと心が読めた。

「一旦切断すると術もやっぱり切れるみたいだな。パソコンの再起動みたいなもんか」

何やら呟く小森先輩を横目に、今度は岩戸先輩が彼の額に触れる。

「悪いね」

岩戸先輩が呟いた直後、伊藤くんが再び倒れた。眠っているように見える。

記憶修正したのか、と何でもなさそうな顔で尋ねる小森先輩に、そ

う、と短く答えている。

うーん、と背伸びする二人。

「もう夜だし俺ら帰るわ」

じゃ、と手を上げる小森先輩。あれ？

「え、伊藤くんは……」

放って帰っちゃうのか？ 突然の帰宅宣言に慌てる。

「運んどいて。家に」

彼を真似し、じゃ、と無表情で手を上げる岩戸先輩。

「え、ちょ、家、知らなっ——」

黒野くんが叫んだのは——二人が夜空に飛び立ってしまった後だった。ジャンプっていうか、本当に飛んでった。ビューンって感じで。どうなってんだろ。本当。

古びた校舎の屋上に虚しく響き渡る嘆きの声。一階の用務員室に、果たして聞こえただろうか。見つかったらまずいよなあ。

「……運ぶか……力、掛けてやるから、二人で片方ずつな……」

「……そうだね……というか家探さないかね……」

私達は肩を落としつつも、伊藤くんを抱え、思いつきり夜空へと跳

んだ。とりあえず、どこか落ち着ける場所が無いとなあ。

あれ、何か、忘れているような。

あ。

黒野くんが跳んだ後、道路、陥没してたよなあ。って事は……。あんまり厚くないだろうし……。貫通するかも……？

まあ、いいか。家、探さないと。

そして翌日、校舎の二階から屋上にかけてでかでかと空いた大穴が一つ、発見される事となる。

屋上にて（後書き）

不定期更新だなあ。

先輩　って名前の後につけるの面倒だし鬱陶しいなあ。

彼とか彼女使うのも限界あるし。

早く長谷川サイド終わらせよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8158o/>

---

マスター・キー

2010年11月24日19時47分発行